

離島における地域のつながりに対する住民意識の世代間比較

- ソーシャル キャピタルの概念を手掛かりに -

新潟大学大学院医歯学総合研究科 長部 麻未 (新潟大学大学院・008075)

隅田 好美 (新潟大学大学院・004481)、鈴木 昭 (新潟大学大学院・006208)

キーワード：ソーシャルキャピタル 地域づくり 高齢化

1. 研究目的

佐渡市の高齢化率は36.3%に達し、新潟県25.5%、全国22.7%に比べてはるかに高い(平成20年)。また、佐渡市には五人組など住民扶助組織が伝わるが、近年そのつながりが希薄化し機能しなくなりつつある。さらに、地域における「医療・福祉・介護」相互の認識不足も現出してきている。このことから、佐渡市では「医療・福祉・介護」が連携した安全・安心の地域作りを目的として、「佐渡市安全・安心地域推進プロジェクト事業(以下「プロジェクト」)を実施することになった。市ではまず、佐渡市のなかでも高齢化が41.3%(平成22年度)と進行しているものの、医療・福祉・介護の資源がコンパクトな地区に集約的に配置され、住民も比較的能動的に行動する羽茂地区(人口約1300人)を選定しプロジェクトを開始した。平成22年度は住民のニーズ把握として、羽茂地区の65歳以上の単身高齢者及び高齢者のみの全世帯(N=414)に訪問聞き取り調査を実施した。調査では予期していた将来への様々な不安や困っていることがらよりも、今は安心であると感じている、との声が多く寄せられた。一方、高齢化の進展につれ、近隣との付き合い等において世代間に相違がみられるなど地域におけるつながりの変化を指摘する意見も多く聞かれた。

ソーシャルキャピタル(地域を豊かにするための互惠・信頼に基づいた人々のつながり)を形成することで、その人にとって生活上の安心感を醸成し、良好なコミュニティの形成は生活不安を減少させる可能性があるといわれている。本研究は、地区住民が将来および地域とのつながりをどのように感じているのか、ソーシャルキャピタルの概念を手掛かりに世代間ごとに比較検討し、高齢社会に直面している地区の安全・安心の地域づくりに資することを目的とするものである。

2. 研究の視点および方法

本研究は、プロジェクト訪問調査で得られた高齢者の安心感とこの基底にあると考えられる地域のつながりをソーシャルキャピタルとしてとらえ、これらの住民意識を生かした地域づくりに資するためのアクティブリサーチである。そこで、高校生、青年期、壮年期、高齢期ごとにグループフォーカスインタビュー(以下「GFI」)を実施し、地域のつながりについてどのように感じているのか、世代グループ間で比較した。

グループの選定及びメンバーの選出は、共同でプロジェクトを実施している佐渡市の高齢福祉課に依頼した。GFIは、高校生(Aグループ 民謡クラブ5名、Bグループ 民謡クラ

ブ6名)、青年期(Cグループ 商工会青年部4名)、壮年期(Dグループ 趣味の会9名)、高年齢期(Eグループ 老人クラブ8名)の5グループに世代別を実施した。

GF1は平成23年3月に実施し、将来の羽茂での暮らしや地域のつながりについてどのように考えているのかということと、その理由について聴取した。インタビューはグループメンバーの同意を得て録音し逐語録を作成した。分析は、まず各グループの逐語録を「将来の暮らし」「地域のつながり」「地域のつながりの変化」「他の世代とのつながり」「将来安心して暮らしていくために必要なこと」の5つに分類しコード名をつけた。次に、5つのファイルのコードを1つにまとめ、カテゴリーごとに再分類し、各世代の意見を比較した。

3. 倫理的配慮

本研究は新潟大学歯学部倫理委員会の承認を得て行った。(承認番号:22 R-30-11-02)

4. 研究結果

羽茂は島内でも気候温暖、自然豊かな地域で人々の絆が強く、安心して暮らせると感じていた(E)。しかし、昔に比べ地域のつながりが希薄化し、特に縦のつながりが無くなってきたと感じていた(D、E)。その要因として、農業の機械化や車による生活があげられた。共同で農作業をすることで世代間のつながりができ、徒歩で町内を移動するときには自然に出会いがあった(D)。また、5人組は冠婚葬祭の手伝い、農作業の助け合い、野菜の分け合いなどを行っていたが、農作業の機械化やセレモニーホールができたことで、街中では5人組の必要性がなくなり、お葬式の手伝いが残っている山間部も、高齢化や世帯数の減少により継続が難しくなってきた(D、E)。

また、島内には大学がないため、進学する高校生は卒業後島外に出る。A・Bグループでは就労先があれば島内に戻ってきたいと考えている人が多かった。しかし、地区の主な産業である専業農家の生活は苦しく、羽茂での就労先が少ないため島外で就職する若者が多く、農業や商売、集落の行事、後継者問題など人口減少や少子高齢化に起因する問題が生じていた(A~E)。さらに、高齢の未婚者が増加し、子どもへの介護負担が大きくなり、仕事や事業の継続が難しくなるという問題もあった(D)。

A・Bグループでは、地域のつながりについて自分はいさつをする程度であり、親と近隣とのつきあいに入っていけないと考えていた。また、就職が可能であれば島内にもどってきたいという人も多くいた。将来への不安について、D・Eグループでは身体が不自由になったとき、車を運転できなくなったときの生活への不安があげられていた。Cグループでは30年後どのようになっているのかわからないが、次世代のために行動する必要があると考えていた。たとえばUターンしてきたとき、羽茂では地域のつながりの強い絆が残っているがこのため逆に帰郷時、地域の集団に入りにくいと感じた。島外へ出た若者がふるさとに戻ってきたときすぐに溶け込むことができるように、彼らが高校生のうちから地域との交流を深めるなどの行動を起こしたい、などがあった。